



医療とアート

あがの市民病院

榎 本 克 巳

先日、学会のポスターセッションの座長をさせていただきました。テーマは雑多でしたが、2題が病院におけるアートについての発表でした。あまり見かけない演題のため困りましたが、失礼のないように少し調べてみると、結構奥深いことがわかりました。

私は内科医なのですが、内科でアートというと、元聖路加国際病院名誉院長であられた日野原重明先生が講演などでお話していた、カナダ出身のオスラー教授（たぶん 初期研修医の評価システム J-OSLER は、その名前を踏まえて名付けられたものだと思います）の名言「Medicine is an art based on science」を思いつきます。訳はいろいろあるようですが、「医学は科学に基づいたアート（技）である」が私は一番好きです。

最初に、この言葉を読んだときは、科学的な知見をもとに、いわゆる「芸術的な」手腕によって、診断や治療を行っていくスーパードクターのような存在を目指すのだと思っていましたが、きちんとその説明を読むと、当時は診断の手段も限られており治療薬も少なかったことから（とはいっても、現代でも医学が進歩したからと言って、すべてを解決することができないわけですから）エビデンスに基づいた診断治療を行いながら、解決できない部分を、患者さんの背景や体質などを考慮して対処していくということのようです。

Ambroise Paré という1500年代の有名な外科医（その著作をのちの時代〈1800年代〉の華岡青洲が参考として、脱臼の整復術を考案したといわれています）が残した言葉を超超意識すると、「cure：治癒」するなんてことはめったにないから、「relieve：症状を取ってあげる」ようにしてあげたいけど、それもだめなら、「comfort：快適

さや安心」を与えることはがんばればできるかもしれない。（本物の名言は、皆さん検索してみてください）

話が大きくそれましたが、今回の本題であるアート：芸術です。私自身は、病院でのアートといえば、廊下や病室に、どこから寄贈されたような書画が飾ってあるだけという情景を思い浮かべましたが、諸外国ではかなり導入されており、スウェーデンやデンマークなどでは、公共施設の予算の数パーセントをアートに支出しなければならないと規定されているほどのようです。

病院にアートの導入も進んでおり、単純にアート作品を置くというのではなく、デザイナー・病院スタッフ・患者及びその家族などが話し合いを行い、どのようなものが望ましいかを協議しています。実際の効果は数値化はできていないようですが、入院日数の短縮や精神科領域などでは回復を早めるという意見が多いそうです。アートやデザインの力で、治療の記憶をポジティブなものに変えたいと考えているようです。

さらに進んで、イギリスなどのように、処方としてのアート：薬ではなく、地域のつながりや生活を支援するための社会資源として、アートコースが提供されているところもあります。講師もただの芸術家ではなく、応急手当やメンタルヘルス・障害者対応・平等・多様性などのトレーニングを受けた人材です。精神疾患や癌や慢性疼痛などでメンタルヘルスの問題を抱えている人向けのコースなどが中心のようですが、その有効性が評価されて、イギリスの国営医療事業である国民保健サービスの投資も受けているそうです。

今回の発表では、一つは、似顔絵セラピーという患者さんの似顔絵を描いて、コミュニケーション

ンを高め、治療への意欲を上げるというものと、病院の一部の廊下や天井などを、アートの空間にするというものでした。どちらも、効果の検証はこれからなのですが、単に医療だけでなく、地域交流の効果も期待しているようでした。これか

らいろいろな形で、病院へのアートの応用がされそうな雰囲気を感じました。医師会の皆様方も、ぜひともアートへの関心を高めていただけると嬉しく思います。

(新発田北蒲原医師会報 令和7年度1月号より)



『緑陰随筆』

“原稿募集”



令和7年5月号に『緑陰随筆』欄を設けて、以下のとおり原稿を募集いたします。
皆様のご投稿をお待ちしております。

題 材：日ごろの診療や体験にまつわるエッセイ、趣味の紹介、思い出話、詩歌 等々、
会員相互の親睦が深まるような原稿をお寄せください。

字 数：750字以内（厳守）

締 切：令和7年4月14日（月）必着

送付方法：メールでお送り願います。

[送付先アドレス] kaihou@niigata.med.or.jp

送 付 先：新潟県医師会 総務課（会報担当）

TEL：025-223-6381 FAX：025-224-6103

そ の 他：同一会員の原稿掲載は各期*に1編のみとさせていただきます。

* 1期（4～7月号）、2期（8～11月号）、3期（12～3月号）